

うつつの不眠など 加味帰脾湯使う

Q 五十二歳、男性。一昨年管理職につきながら、

部下に続き自分もリストラされ、三十年勤めた企業を去りました。関連会社に配属されましたが、急に体力と気力の衰えを感じ、食欲もなく、思い詰めると「いつそのこと」と思うことも何度かありました。心療内科や精神科ではうつ病と診断され薬を処方されました。服用すると一日中眠いようなボーツとした感じで仕事になりません。こんな症状に効く漢方の処方がありますか。

A 質問者は手紙の中で「結局自分がしつかりしないからだ」という自責の念を強調している。こうした傾向が強いのはうつ病の特徴で、「励ま

し」は本人の負担になるのでさけるべきである。

質問者は現在抗うつ剤を服用して、不安や焦燥、肉体的苦痛をとろうとしている。「思い詰めなくなつたかわりに、一日中ボーツとして意欲がわかない」という。漢方の特徴は心と体を分けて治していく治療体系にある。

顔色がすぐれず、不眠・食欲不振を訴えるものによく使われる処方に加味帰脾湯（かみきひとう）である。みずおちやろつ骨あたりの不快感や口のねばり感などを訴える場合は柴胡加竜骨牡蛎湯（さいこかりゆうこつぼれいとう）などが使われる。古典には「鬱々（うつうつ）として悲愁し多夢で熟睡できず、人に接するのを嫌がり、暗い部屋に閉じこもりがちな状態により」などと記されている。